



監督署の窓

リーマンショックによる経済不況の回顧

2008年11月のある日、当時勤務していた監督署の電話が鳴った。大手自動車部品メーカーが署長に報告したいことがあるらしい。これが猛烈な勢いで日本の産業界を震撼させ、100年に一度と言われた未曾有の経済不況の一報であった。署長と同席して話を聞くところ、海外からの受注が相当な勢いで減少して回復の兆しがない。急ぎよ全社的に生産調整に



入った。社員の雇用を守るため、派遣労働者の派遣契約に手をつけざるを得ない状況にあるとのこと。
「チャプターイレブン (Chapter 11)」という聞きなれない単語を知ったのもこの時だった。アメリカにおける経営再建に関する法的手続きの一つで、日本でいう民事再生法に相当し、大手自動車メーカーであるフォードへの適用が議論されて

遣元企業に対する法令遵守の指導を要請した。とは言っても派遣先企業を規制する項目はほとんどない。
この報告を端緒に、同業他社に対して現状報告を求めた。大半の企業で派遣労働者のほぼ全員がいわゆる派遣切り(契約期間満了による退職)となる見通しにあり、一署管内だけで数千人の派遣労働者が対象となる深刻な状況が判明した。

いた。愛知県内を中心に展開する社員12,000名のメーカーの幹部社員から倒産の危惧を言及させるほど切迫した状況にあった。
署長は、企業における法令遵守と併せて派遣労働者を雇用する派

一方署の相談窓口では、年末近くになって変化が現れた。普段は日本人の来客が大半であるが、徐々に外国人派遣労働者で溢れた。ブラジル行きの航空券は帰国する派遣労働者により2〜3ヶ月先まで満席である。続いて、派遣切りを受けた日本人派遣労働者が全国の出身地等に散って行く。所持金のないまま社員寮を退去させられ、給料日までの数日を公園でホームレスとして過ごす猛者も現れた。さらに派遣会社と交わされた不正事項等が一斉に露呈し、労働組合、市会議員、マスコミなど

が慌ただしい。
眼前で発生している異常事態に右往左往しながらも監督署では、「啓発指導」と称して、いわゆる派遣切りの抑制や宿泊施設の確保など法令違反以外の項目に関する行政的要請に多くの時間を費やした。極めて異例なことだった。
同様の経済不況は当面の間発生しないと思いますが、限界を超えた行政指導を展開したことの意義を十分に踏まえ今後の行政展開に反映させるとして欲しい。

表紙のことば

犬山祭

堀部敏郎

寛永十二年(一六三五年)に始まる針綱神社の祭礼。まるで錦絵のような豪華絢爛さを

誇る十三両の車山は、それぞれからくり人形を備える。国宝のお城に相應しい華やかさに陶酔。

データ ニコンD700
カメラ 24〜120ズーム
レンズ